筑紫女学園大学リポジト

A Categorical Approach to Verb Meanings

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1011

動詞の意味とカテゴリー

緒　方　隆　文

A Categorical Approach to Verb Meanings

Takafumi OGATA

1．はじめに

本稿はカテゴリースキーマを用いて、動詞の意味をより明確な形で示すことを目的とする。カテゴリースキーマとは、カテゴリーとその成員によって意味を表記したものになる。動詞はその特徴や取る構文によって分類されてきた。本稿では分類を目的とせず、意味表記の道具としてカテゴリースキーマを提示する。結論として、基本意味が4つ、〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為〉があり、単体あるいは複合して、スキーマを形成することを示す。これら基本意味4つは、互いに関連しておりネットワークをなす。そしてこのネットワーク上で、意味が拡張し推移していくことを示していく。

以下の構成では、2節でカテゴリー分析における基本の意味4つを概観する。そして3節でこの4つの意味がネットワーク上で結びついていることを示す。4節で意味の推移を単体レベル、構文レベルで見ていく。最後に5節で〈行為〉〈存在〉間での途中段階への推移を見ることとする。

2．カテゴリー分析と動詞の意味

本稿は動詞の意味を、カテゴリー分析で考察する。カテゴリー分析とは、カテゴリーとその成員の関係で意味を表す分析になる。カテゴリーには、状態カテゴリー(STATE)、行為カテゴリー(ACT)、場所カテゴリー(LOC)、個体カテゴリー(INDIV)の4種類を設定する。状態カテゴリーではある状態が、行為カテゴリーではある行為が、場所カテゴリーではある場所が、個体カテゴリーではある個体が、カテゴリーになっている。一方成員には、個体成員と属性成員がある。基本形は(1)のように、カテゴリー内に、成員が存在する。

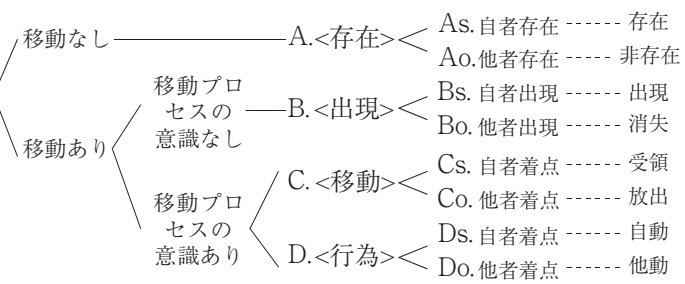
(1)

しかし(1)のような静的な関係だけでなく、動的なものもある。ものが移動したり、ものが行為対象になることもある。本稿では、動的なものはすべて、移動によるものと考える。物理的移動はある場所への移動になる。状態変化は、ある状態への移動になる。行為対象は、エネルギーが対象に移動すると考える。移動するものは、個体成員、属性成員、エネルギーの3つがある。この移動の概念をもとに、動詞に関わる意味を分類したものが(2)になる。

ここでは基本の意味が4つある。〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為〉である((2)のA, B, C, D)。これらは各々自者と他者に細分される((2)のAs～Do)。自者 / 他者の分類は、自者と他者のどちらで存在 /

出現／着点が起こるかの違いになる。表の右端には対応する概略的な意味を記載している。

(2)

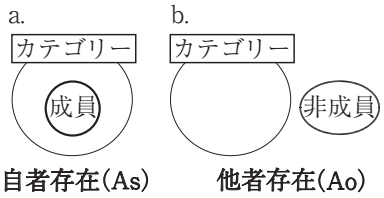


(2)ではまず、移動のあるなしで分けられる。移動なしに〈存在〉がある。移動ありはさらに、移動プロセスが意識されるか、されないかで分けられる。意識されないのが〈出現〉になる。意識されるものは、何が移動するかで分けられる。個体成員や属性成員が移動する場合は〈移動〉、エネルギーが移動する場合は〈行為〉となる。この4つの意味(A, B, C, D)が、基本の意味となる。これらはさらに、どこで起こるかで自者と他者に分かれる(As〜Do)。以下4つの基本の意味を概観する。

2.1 〈存在〉

まず〈存在〉の意味は、移動がないため、カテゴリーと成員の静的関係になる。具体的には(3)に示す2つ、自者存在(As)と他者存在(Ao)がある。自者存在(3a)では、カテゴリー内に成員があるが([存在])、他者存在(3b)では対象成員がカテゴリー外にある([非存在])。

(3)



カテゴリーには、個体カテゴリー、場所カテゴリー、状態カテゴリー、行為カテゴリーのすべてがなれる。成員には、属性成員と個体成員の両方ある。他者存在の非成員は、単に当該カテゴリー外にあるだけで場所指定がない場合と、特定の別カテゴリーに存在する場合の2つがある。

自者存在の例を(4)に示す。(4a)では個体カテゴリーに個体成員が含まれ、所有を表す。(4b)では個体カテゴリーに属性成員が含まれ、恒常的特性を表す。(4c)では状態カテゴリーに個体成員が含まれ、一時的特性を表す。(4d)では場所カテゴリーに個体成員が含まれ存在を表している。(4e)では行為カテゴリーに個体成員が含まれ、習慣を表している。習慣化されているとはいえ、常にその行為をしているわけではないので、カテゴリーの拘束力が弱い(4.1節でスキーマも含め後述)。

(4) a. His brother owns a lot of land. b. He has guts enough to do that.
c. Father had bad temper with you. d. Similar stories existed in Japan.
e. I walk around with a dog every morning.

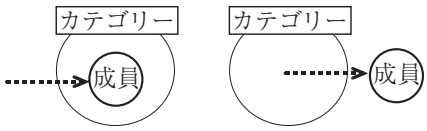
次に他者存在では、(4)に対応するものがある。例を(5)に示す。(5a)では元の個体成員が個体カテゴリーの成員でなくなっている。(5b)では属性成員が個体カテゴリーに含まれないことを示している。(5c)では個体成員が状態カテゴリーに含まれず、一時的に特性がないことを述べる。(5d)では個体成員が場所カテゴリーに存在しないことを述べる。(5e)では個体成員が行為カテゴリーになく、行為をしていないことを述べる。構文的には(4)を否定文にすると、他者存在の意味が生じるが、ここでは語句レベルの例をあげる。

(5) a. I've lost my passport. b. He really lacks confidence. c. She lost consciousness.
d. Slavery ceased to exist in this country. e. The man failed to appear in court.

2.2 〈出現〉

〈出現〉は移動の一つであるが、移動プロセスが意識されない。そのため最終状態のみに焦点がある。自者出現(Bs)では最終状態、[成員になった状態]のみに焦点があたる。移動プロセスが意識されないため、出現の意味になる(スキーマは(6a))。一方他者出現(Bo)でも最終状態、[成員でなくなった状態] のみに焦点が当たる。移動プロセスが意識されないため、消失の意味になる(スキーマは(6b))。スキーマでは、移動プロセスが意識されないことを破線矢印で示す。カテゴリーは、個体カテゴリー、場所カテゴリー、状態カテゴリーがある。成員は、属性と個体の両方ある。

(6) a. b.



自者出現(Bs)　他者出現(Bo)

自者出現の例が(7)になる。(7a,b)では、個体成員が場所カテゴリーに出現する。(7a)では花壇、(7b)では当該フレームにモノが出現する。(7c)も場所といえば場所だが、個体成員が個体カテゴリーに出現する。(7d)では、個体成員が状態カテゴリーの成員に一時的になる(その状態になる)。

(7) a. He dug a hole in the flowerbed.　b. They made a movie about his life.
c. She got a rash on both legs.　d. He's got a disease.

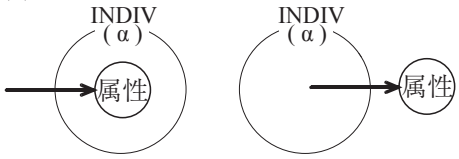
一方、他者出現の例が(8)になる。(8a)では、個体成員が場所カテゴリーから消失する。(8b)では、個体成員が個体カテゴリーから消失する。(8c)では、個体成員が状態カテゴリーから消失する。

(8) a. The magician vanished from the stage.　b. Her rash has completely resolved.
c. He has fully got over his illness.

2.3 〈移動〉

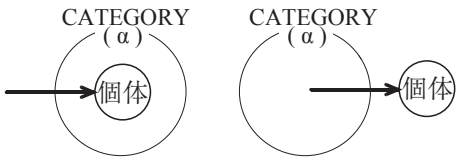
次に〈移動〉では、移動プロセスが意識される。これを移動の軌跡を実線で示す。このとき起点は必ずしも特定されない。〈移動〉はさらに、成員の種類で2つに分かれる。一つは、成員が属性成員の場合(スキーマは(9))、もう一つは、成員が個体成員の場合(スキーマは(10))になる。自他で言えば、(Cs)が(9a)(10a)、(Co)が(9b)(10b)になる。

(9) a. b.



自者着点(Cs)　他者着点(Co)

(10) a. b.



自者着点(Cs)　他者着点(Co)

まず属性成員の移動(9)では、カテゴリーは個体カテゴリー(INDIV)になる。自者着点(9a)では、属性が移動し、個体カテゴリーの成員となる。個体カテゴリー内に属性成員があるので、恒常的性質の獲得を意味する(例は(11))。他者着点(9b)では個体カテゴリーの外に、属性成員が移動するため、恒常的属性が消失する(例は(12))。

(11) She got old enough to take care of herself.　(12) They have lost youthful appearance.

次に個体成員が移動する(10)では、カテゴリーは、個体カテゴリー、場所カテゴリー、状態カテゴリー、行為カテゴリーのいずれもとる。自者着点(10a)では個体が移動して、カテゴリーの成員となる。他者着点(10b)であれば、個体成員はカテゴリー外へと移動し、成員でなくなる。

これをカテゴリー毎に、具体例を見る。まず個体カテゴリーであれば、自者着点では個体の保有化、他者着点では個体の非保有化になる。自者着点の例を⑬、他者着点の例を⑭に示す。

⑬ He received a letter from England.　　⑭ All the grime disappeared.

次に場所カテゴリーの場合、自者着点では場所内への物理的移動、他者着点では場所外への物理的移動になる。ただし自者着点の場合、必ずしも場所カテゴリー内へと移動せずに、単に方向だけの場合もある。自者着点で成員になるのを⑮a、方向だけを⑮bに示す。他者着点は⑯に示す。

⑮ a. The wind blew in the house.　　b. A lot of birds came at us.

⑯ The plane left Fukuoka at 7:40 in the morning.

行為カテゴリーの場合、自者着点では個体がその行為を行うことを、他者着点では行為をしなくなることを意味する。自者着点の例を⑰、他者着点の例を⑱に示す。

⑰ The baby suddenly began to cry loudly.

⑱ The baby stopped crying when placed in the baby carriage.

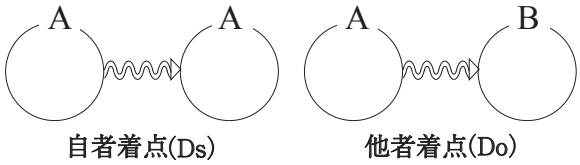
最後に状態カテゴリーでは、自者着点では個体がその状態に一時的になることを、他者着点ではその状態がなくなることを意味する。自者着点の例を⑲、他者着点の例を⑳に示す。

⑲ She got scared again.　　⑳ I finally got over my cold.

2.4 〈行為〉

〈行為〉では、エネルギー移動が起こる。エネルギーを送ることも、移動の一種とみなす。これにより動詞の意味はすべて、移動ありなしも含めて、移動という概念で表記される。〈行為〉にも自者と他者の2つがある。エネルギーの発信者と受信者が同じ自者着点(Ds)((21a))と、発信者と受信者が異なる他者着点(Do)がある((21b))。(21a)は主に自動詞、(21b)は主に他動詞において用いられる。エネルギー移動は単独で用いられることもあるが、〈移動〉や〈出現〉と複合的に用いられることが多い。以下、自者着点と他者着点に分けて考察する。

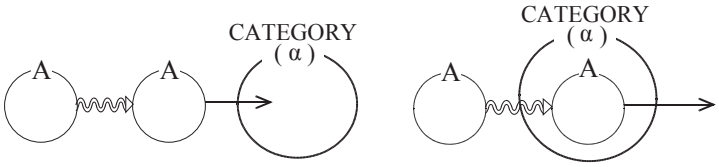
㉑ a.　b.



まず自者着点(Ds)(21a)は、〈行為〉だけでは現れない。〈行為〉+〈移動〉、または〈行為〉+〈出現〉の複合スキーマになる(スキーマは㉒ ㉛)。前半の〈行為〉部分ですでに自者着点 / 他者着点(21a,b)に分かれたが、さらに後半の〈移動〉または〈出現〉部分でも自者 / 他者が2つに分かれる。つまり〈行為〉の自者着点(Ds)(21a)だけでも、〈行為〉+〈移動〉で自者 / 他者2種類、〈行為〉+〈出現〉で自者 / 他者2種類の計4種類がある。

まず〈移動〉との複合の基本スキーマは㉒になる(〈行為〉+〈移動〉)。(22a)が〈移動〉の自者着点、(22b)が〈移動〉の他者着点となる。(22a)では、AがA自身にエネルギーを送り、A自身がカテゴリー(α)に移動する。AがA自身にエネルギー移

㉒ a.　b.



動するのは、主として意図的行為を表す。意図的でなければ、〈移動〉だけの表記になる。移動先のカテゴリーが、場所カテゴリーであれば、その場所へ移動する(例は(23))。行為カテゴリーであればAはその行動をする(例は(24))。状態カテゴリーであれば、その状態になる(例は(25))。

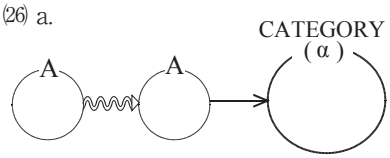
(23) The police entered the house to search for suspects.

(24) She began questioning the meaning of life.

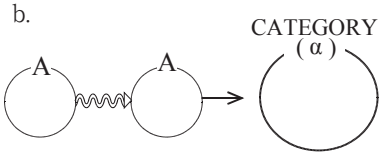
(25) The man assumed cheerfulness to have a physical power.

ただ基本形(22a)と異なり、(26)に示すように、Aは必ずしも移動してカテゴリー成員にならない。(26a)はカテゴリーと接触のみ、(26b)はカテゴリーに向かうことを、(26c)は着点となるカテゴリーが不明で移動していることだけを示している。各々の例を(27)に示す。

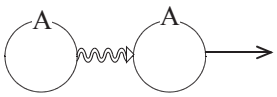
(26) a.



b.



c.



(27) a. (26a): He dashed against the barber pole. b. (26b): Bob moved towards the door.
c. (26c): The fire truck was already moving when he jumped onto it.

次に〈行為〉+〈移動〉の他者着点(22b)を見る。(22b)では、Aはすでにカテゴリー(α)の成員である。AはA自身からエネルギーを受け、Aはカテゴリー外に移動する。そのためAは成員でなくなる。カテゴリーには、(22a)と同様、行為/状態/場所カテゴリーがある。例を(28)-(30)に示す。

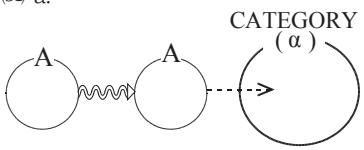
(28) He broke away from smoking without any problem. [行為カテゴリー]

(29) She could recover from her cold in one day. [状態カテゴリー]

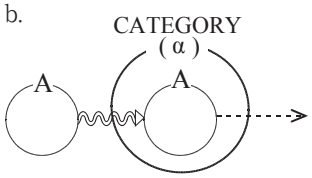
(30) Her aunt left the room with her. [場所カテゴリー]

今度は〈出現〉との複合スキーマ(31)を見る(〈行為〉+〈出現〉)。ここでも自他2つある。自者着点(31a)ではAが自身に働きかけ、Aがカテゴリー(α)に出現する(例は(32))。一方(31b)他者着点では、カテゴリー(α)から消失する(例は(33))。個体成員が出現/消失する場合、場所カテゴリーが基本となる。

(31) a.



b.

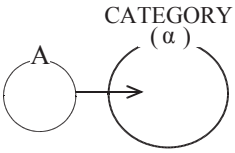


(32) She emerged into the kitchen.

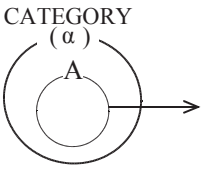
(33) Seventy-five prisoners absconded from prison in the country.

むろんこうした自動詞には、Aからのエネルギー移動が感じられない(34)(35)のパターンもある。この場合、単なる〈移動〉((34))または〈出現〉((35))を表す。〈移動〉の例として(36)、〈出現〉の例として(37)がある。〈行為〉との複合スキーマと違い、(34)(35)では主語に意図性はない。

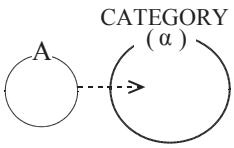
(34) a.



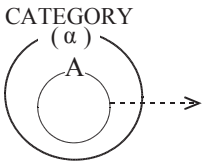
b.



(35) a.



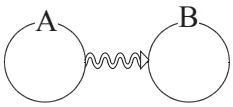
b.



(36) a. (34a): The wind blew into the living room. (37) a. (35a): The term appeared in the 19th century.
b. (34b): The bright colors faded quickly. b. (35b): The fire went out.

次に他者着点(Do)(21b)を見る。この場合、エネルギー移動の着点が他者Bになる。このとき基本スキーマは3つある。1つめはエネルギー移動のみのスキーマ(38)がある(例は(39))。接触動詞などがこれに含まれ、Bの変化は含意されない。

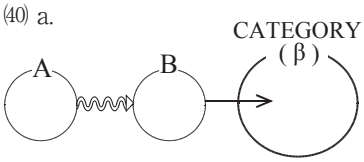
(38)



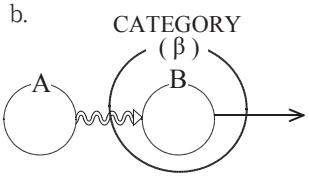
(39) She hit the man on the head.

残りの2つは、(22)(31)と並行的である。(40)が〈行為〉+〈移動〉、(41)が〈行為〉+〈出現〉の複合スキーマになる。違いは、着点が他者Bになるだけである。(40a)では、AからのエネルギーをBが受け、カテゴリー(β)に移動する。(40b)では元々成員であったBが、エネルギーを受け、カテゴリー(β)の成員でなくなる。一方(41a)では、同様にエネルギーを受けたBが、カテゴリー(β)に出現する。(41b)では、元々成員だったBが、カテゴリー(β)から消失する。(40a)の例を(42)、(40b)の例を(43)、(41a)の例を(44)、(41b)の例を(45)に示す((42)はCarrier and Randall (1992: 183)、(45)は影山 (2013: 114))。

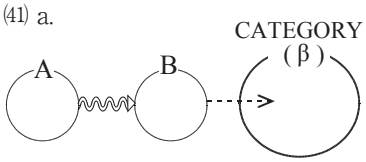
(40) a.



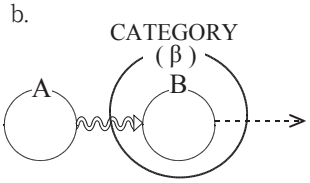
b.



(41) a.



b.



(42) She pounded the dough into a pancake. (43) She carefully removed the pan from the oven.
(44) I cooked her a dinner to celebrate her birthday. (45) She wiped the dust off.

(40)(41)においても、自者着点と同様にAからのエネルギー移動が感じられないものがある。しかしそのスキーマは、カテゴリーと成員のラベルが異なるだけで、実質(34)(35)と同じになる。そのためここでは省略する。

こうしたエネルギー移動が起こるのは、行為動詞であるが、行為動詞すべてが(21)のスキーマを取るわけではない。基本的には、行為者が意図的に行為を起こす場合に限られる。また移動するエネルギーには、強さの違いがある。強く働くとき二重波線矢印で示し((46a))、弱く働くとき一重波線矢印で示す((46b))。こうした違いは分析にあたり、エネルギーの強弱を示すために用いる。

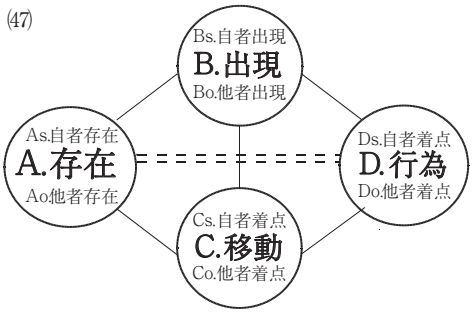
(46) a. b.

以上動詞または構文の分析で用いる基本意味4つを概観した。状態とか行為などの分類ではなく、移動があるかないかでの分類になる。ここで述べた意味〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為〉は、動詞の分類ではない。意味の分類になる。動詞は、複数にまたがる意味を持つのが普通である。しかしこの複数の意味には、方向性がある。つまり意味拡張には方向性があるため、互いに意味のネットワークの中に位置付けられている。それを次節で見ていく。

3．意味のネットワーク

動詞の意味は一つとは限らず、複数の意味を持ったり、複合的な意味を持つこともある。しかしその意味の広がりには、ある程度法則性がある。つまり前節で述べた〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為〉の意味は、ばらばらに存在するのではなく、ネットワークを構成する。意味のネットワークを通して、意味拡張が起こる。図示したネットワークが(47)になる。

(47)



(47)では4つの意味が結びつけられている。各々の意味には自者と他者がある。意味の推移は基本直接的になる。つまり〈存在〉から〈移動〉への推移、〈出現〉から〈移動〉への推移など、途中段階をもたずに推移する。それを(47)では実線で示している。項の現れ方が同じままで意味が推移する。一方〈存在〉と〈行為〉間の推移は、途中段階への推移を許すため、二重破線で表記されている。むろん〈存在〉から〈行為〉に直接推移もあるが、途中段階に推移する構文がいくつかある。このとき項の現れ方が変化したり、文法的変形がおこることで意味が推移する（5節）。以下、意味の推移を見る。

4．意味の推移

ここでは(47)の実線での推移、4つの基本意味間で直接推移する例を見ていく。ここでは、基本の意味への途中段階に推移することはない。

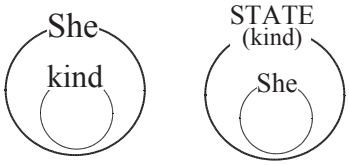
4.1　〈存在〉⇒〈移動〉、〈存在〉⇒〈行為〉＋〈移動〉、〈移動〉の追加

まず〈存在〉⇒〈移動〉への推移を見る。状態動詞で〈存在〉から、〈移動〉の意味への推移がある。状態動詞では、通例静的な状態を表すことから、〈存在〉の意味になる。そこには移動の含意はない。例えば(48a)の場合、(49a,b)の2つ意味があるが、どちらも成員とカテゴリーの静的な関係になる。

(48)　a. She is kind.　　b. She is kind to me.

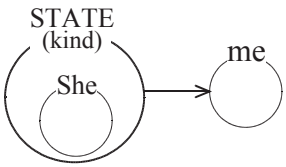
(49a)は個体の中に属性成員があるため、恒常的性質を表し、(49b)は属性カテゴリーの中に個体成員があるため、一時的な性質を表している（cf. The teacher is kind today for some reason.）。つまり恒常的か一時的かで、どちらがカテゴリーになり、成員になるかが決まる。

(49) a.　　b.

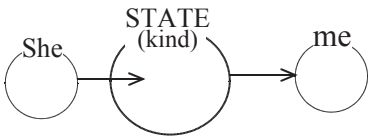


この静的な意味〈存在〉は、(48b)のように方向性を表す前置詞句が来ると、〈移動〉の意味へと推移する。これは(49b)の一時的状態のものに、方向性が生じたものになる。一時的状態になったままで、[me] へと移動する（スキーマは(50)）。つまり一時的に親切な[she]が、[me]にその状態で接することを示している。(51)はそれを含め、(48b)をスキーマ化したものになる。本来は kind を固有属性として持たない she が、一時的状態（kind）に移動し、me へ移動し親切

(50)



(51)



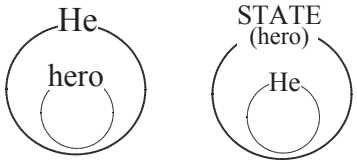
にする。ここではbe動詞は〈存在〉から〈移動〉へと意味拡張する[*1]。

こうしたことは進行形でも起こる。(52a)の意味は、同様に(53)の2つがある。

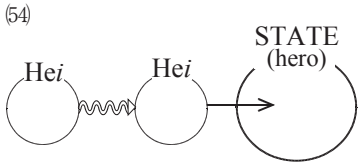
(52) a. He is a hero. b. He is being a hero.

(53a)は属性heroが成員となっているので恒常的性質、(53b)はheが状態カテゴリー(hero)の成員となっているので一時的性質を表している。これが(52b)のように進行形になると、Heが移動し(53b)の状態が生じる意味になる。この時〈存在〉から、〈行為〉+〈移動〉の複合スキーマへと推移する。スキーマ(54)に示すように、意図的行為と考えられるので、[he]が自分自身にエネルギーを送る。これにより[he]は、状態カテゴリー(STATE (hero))へと移動し成員となる。つまりheroぶった行動をする。

(53) a. b.



(54)

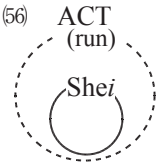


これと並行的なことが行為動詞にも起こる。行為動詞は(55a)のように、習慣を表せる。

(55) a. She runs every day. b. She is running for thirty minutes.

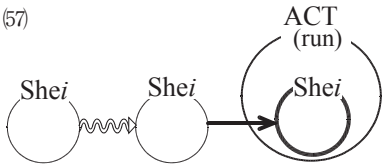
習慣の場合、繰り返し行為がなされるため、断続的ではあるが、常にその行為状態にあると言える。カテゴリーの観点からは、静的な関係と考える。しかし習慣は恒常的属性とは言えず、一時的属性が継続しているにすぎない。また行為は断続的であるため、行為カテゴリーの拘束力が弱い。拘束力が弱いことを破線で示すと、習慣スキーマは(56)になる。(56)では、行為カテゴリーの中に、個体成員があり、sheがrunという行為を断続的に行っていることを示す。

(56)



これが(55b)のように進行形になると、(56)が移動の結果となるような、スキーマ(57)になる。ここには〈存在〉から〈行為〉+〈移動〉への推移がある。(57)では、[she]が自分自身にエネルギーを発することで、[she]が行為カテゴリーに移動し成員となる。行為カテゴリーは、断続的ではないため実線で表記される。なお行為動詞の進行形の場合、一時的にその行為にあることを示すので、移動プロセスに焦点があたることを太線で示してある。ここで注意しなければならないことは、〈存在〉と〈行為〉間では、単純形のままで推移することはない。そのため何らかの文法的操作が必要となる。なお、進行形で未来を表す場合は、成員になっていない途中過程を表すため、単に当該カテゴリーへの方向を示すだけになる。

(57)

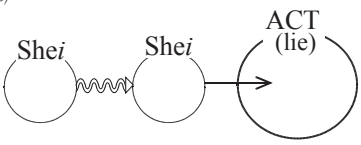


また推移というより、意味が追加される場合もある。例えば(58)では、(58a)に前置詞句(to me)を付加することで、(58b)では〈移動〉の意味が追加される。

(58) a. She lied. b. She lied to me.

(58a)のスキーマは、(59)になる。意図的に嘘をつくことから、[she]から自身にエネルギーを発し、それにより行為カテゴリー(lie)へと移動し、成員となる(嘘という行為をする)。

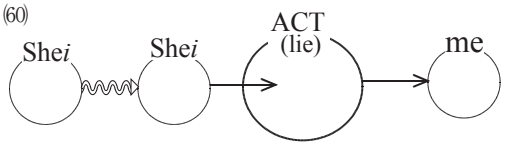
(59)



一方(58b)ではさらに行為カテゴリーの成員となった[she]

が、どこに向かうかが追加されている。スキーマは⑹で、[me]への移動が追加されている。このように基本の意味間の推移だけでなく、意味を追加することもある。ここで伝えたいことは、基本の意味4つは、動詞の分類ではなく、意味の分類であって、つねに複合的に組み合わさる可能性を持っており、複合スキーマをつくることにある。

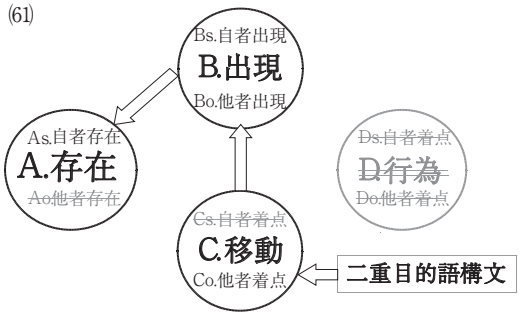
⑹



4.2　構文内での意味の推移（二重目的語構文）

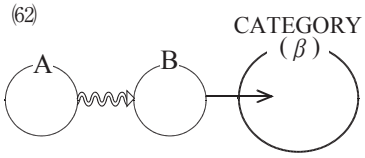
同一構文内での意味の推移の例を一つあげる。ここでは二重目的語構文を取り上げる。二重目的語構文は〈移動〉〈出現〉〈存在〉の意味を持ち、⑹に示すようなネットワーク上で意味の推移が起こる（cf. 緒方(2018)）[*2]。⑹ではC. 移動のCo他者着点を起点（典型例）とし、B. 出現（自者／他者両用法）へと推移し、さらにA. 存在のAs自者着点へと推移する。

⑹



まず典型例である〈移動〉から見る。スキーマは⑹（=(40a)）になる。⑹では、Aが主語、CATEGORY(β)が間接目的語、Bが直接目的語になる（本節スキーマはすべて同じ）。例として⑹をあげる。

⑹

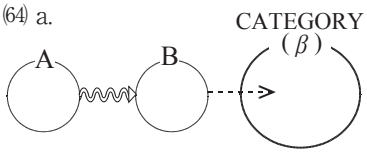


⑹　a. I gave John a book.　　b. I carried Bill a six-pound ashtray.　　(Green 1974: 70, 78)

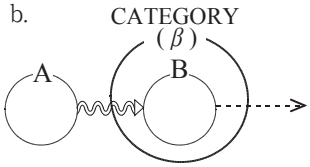
⑹ではa bookがJohnに、a six-pound ashtrayがBillに移動している。

次に〈出現〉は自者／他者両方ある。スキーマは自者出現⑹a（=(41a)）、他者出現⑹b（=(41b)）になる。前者が出現（例は⑹）、後者が喪失（例は⑹）の意味になる。⑹ではa steakやa bookがJohnに出現しており、⑹ではhis jobやten sillingsがHarryやhimから消失している。

⑹ a.



b.



⑹　a. Mary burned John a steak　　b. I bought John a book.　　(Green 1974: 92, 70)

⑹　a. Bill lost Harry his job.　　(Jackendoff (1990: 260))

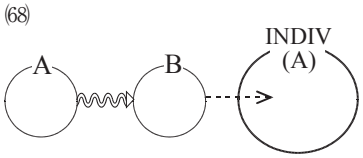
　　b. They fined him ten shillings.　　(Green 1974: 70)

なお自者出現には、自分自身に出現する⑹のような例もある。

⑹　Bill baked himself a cake. (Green (1974: 190))

ここではカテゴリーが個体カテゴリー(INDIV)となり、A自身（再帰代名詞）になっている（スキーマは⑹）。

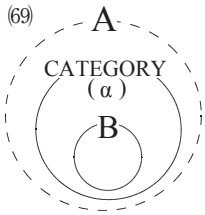
⑹



最後に〈存在〉のスキーマは⑹になる。⑹では存在構造（カテゴリー(α)と成員B）が、カテゴリーAの成員となっ

ている。つまりAが存在構造に緩やかに関与している。関与が弱いことを、破線で示している。例に(70)がある。

(69)



(70) a. He forgave her her sins. b. He envied the prince his fortune.

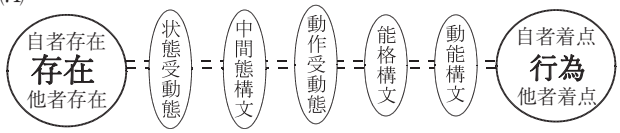
(Goldberg 1995: 132)

(70)では、her sins が her に、his fortune が the prince に存在している。二重目的語構文では、同一構文内で意味が推移し拡張する。むろんこれ以外の構文でもこうした意味の推移は起こる。

5. 〈行為〉⇔〈存在〉での途中段階の推移

〈行為〉⇔〈存在〉の推移では、基本意味間の途中段階への推移が可能となる。途中段階の構文として、動能構文、受動態、中間構文、能格構文、able 形容詞、目的語消去動詞構文などがあるが、ここでは前者4つを取り上げる。この推移には、項の現れ方が変わったり、文法的変形が行われる。

(71)



途中段階への推移とは、〈行為〉の視点からは行為性が弱まり、〈存在〉の視点からは行為性が強まるものになる。これには程度差があり、〈行為〉に近いものと、〈存在〉に近いものがある。取り上げる構文を並べたものが、(71)になる。この程度差の違いは、行為性を弱める方策の数と、その強さにある。カテゴリースキーマにおいて、行為性を弱める方策に次のようなものがある。(72)の方策で使う数が多いほど、また方策が強いほど行為性はより弱化される。以下、具体例とともに各構文を概観する。

(72) 1.【行為者の弱化】: 行為者の背景化・一般化

2.【二次行為者の追加】: 本来の行為者以外を、行為者として追加

3.【エネルギー弱化】: 移動エネルギーの弱化([量])、または着点未到達による弱化([方向])

4.【被動者の主題化】: スキーマ向きの逆転

5.【ラベル差し替え】: 行為者ラベルを被動者ラベルに差し換え(A ⇒ B)

5.1 動能構文

他動詞用法と、前置詞を伴う用法の両方を持つ動詞があり、動能交替と呼ばれる現象がある。(73)がその例で、前置詞を伴う方が、動能構文と呼ばれる(例はLevin 1993: 41)。

(73) a. Paul hit (at) the fence. b. Margaret cut (at) the bread.

c. Faustina sprayed (at) the lilies.

動能構文では前置詞が挿入されることで、対応する他動詞構文に比べ、間接的な関わりとなり、他動性が弱まる。それをここでは(72)3【エネルギー弱化】が起こっているからと考える。弱化には2種類あり、一つはエネルギーの長さが短くなり、対象まで届かない。二つめはエネルギー量が減り、行為者による行為の関与が弱くなるがある(二重破線から一重破線で表記)。

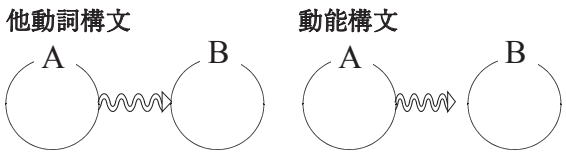
まずエネルギーの長さが短くなるものに、(74)のような例がある。(74)の動能構文では、試みるという意味で、対象Bにエネルギーが達することを含意しない。行為性の弱化が起こっている。

(74) a. My friend shot at the bottle.　　b. The soldier struck at the fence.

c. They pounded at the metal.

スキーマは、対応する他動詞構文が(75a)、動能構文が(75b)になる。動能構文では、対象Bにエネルギーが達していない。

(75) a.　　b.

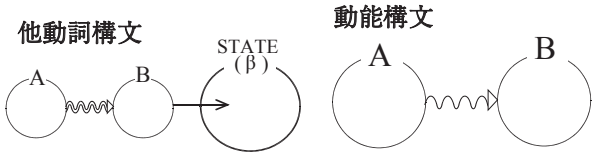


次にエネルギー量が弱まるものに、2種類ある。一つはエネルギーの弱化で、変化の含意がなくなる。(76)のような例では、他動詞構文が(77a)、動能構文が(77b)のスキーマを持つ。

(76) a. Jane cut at the apple pie.　　b. He slapped at his left thigh.

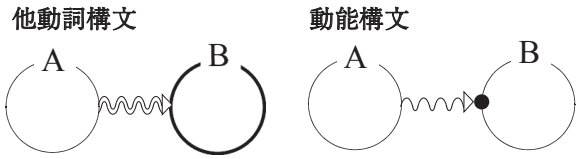
(77a)ではAからのエネルギーによりBが状態カテゴリー(β)へと移動する。そのため状態変化の含意がある。しかし動能構文の場合、状態変化の含意がない。エネルギー弱化のため、Bの移動を引き起こせないからと考える。それを示したのが(77b)になる。弱化されたエネルギーが、Bに到達するだけの意味になる[*3]。(76)の動能構文では、行為対象の目的語が変化する含意がなくなる。そのため、状態カテゴリーが存在しなくなる。

(77) a.　　b.



もう一つのパターンは、他動詞構文では対象B全体にエネルギーが波及するのに対し、動能構文ではその一部のみにエネルギーが及ぶものがある。(78a)の他動詞構文では、対象B全体にエネルギーがわたり、全部に行為が及んだり、支配するという意味がある(B全体を太線で表記)。一方(78b)ではエネルギー弱化のために、全体にいきわたるエネルギーがないため、一部にしかエネルギーが及ばない。そのため繰り返しの解釈を許すこともある。(79)の動能構文では行為が全体に及ぶ含意がなく、(80)では全体(a mule)を支配するという含意がなくなっている。

(78) a.　　b.



(79) The boy wiped at the jam covering his mouth.　　(80) Suzann rode on a mule.

動能構文では、3種類のどのスキーマを取るにしても弱化操作が1つしか行われておらず、状態化は弱い。そのため行為性を強く維持している。

5.2　能格構文

(81)のような能格構文では、他動詞構文での被動者が主語になり、自動詞になっている。被動者主語が自らの力で、行為を行い何らかの変化が起こることを述べる文になる。被動者自らの力で行為が起こるため、元々の行為者が含意されない。そのため被動者主語が、行為者として機能する。

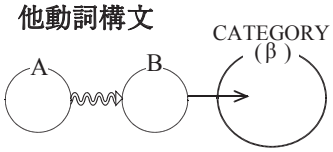
(81) a. The ship sank.　　b. The ice melted　　c. The door opened.　　d. The vase broke.

能格構文では被動者が主語になっているため、行為性は弱まっている。それは(72)5の【ラベル差し替え】が働いていると考える。つまり行為者のカテゴリーラベルが付け替えられる。他動詞構文

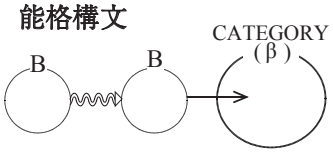
(82)のカテゴリーラベルAがBに付け替えられる。このとき能格構文のスキーマは(83)になる。(83)では行為者Aが持つ特性(他動性)を維持したまま、ラベルがB(被動者自身)に付け替えられる。ラベルが変わっただけなので、エネルギー自体は弱まることはない。そのため(82)と同様、B自身へのエネルギー移動で、Bが状態カテゴリーへ移動し成員となる(Bに変化が起こる)。

能格構文では、他動性が弱まるとしても、行為性は高い。この理由は状態化操作が一つだけだからと考える。

(82) 他動詞構文



(83) 能格構文



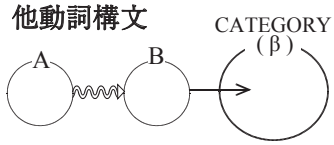
5.3 中間構文

(84)に示す中間構文では、本来であれば行為を受けるものが主語にきて、それが持つ特性により、行為事象が成立することを述べている。総称的な意味を持つため、状態性は能格構文より高い。

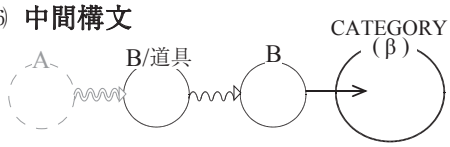
(84) a. This book sells well. b. This article reads easily. c. Local politicians bribe easily.

しかし中間構文では、能格構文と違い、動作主が含意される。動作主を保持しながら、状態性が高いのは、状態化の操作が多いからと考える。具体的には3つの状態化操作が働いている。対応する他動詞構文(85)に対して、中間構文は(86)のスキーマを持つ。以下(86)で3操作を示す。

(85) 他動詞構文



(86) 中間構文



一つめは(72)1【行為者の弱化】で、動作主を一般化し、背景化する。背景化されるため、行為者が弱化される(Aを灰色破線で表記)。二つめは(72)2【二次行為者の追加】で、本来の行為者ではなく、二次的な行為者(被動者や道具)をスキーマ上に追加する(B/道具カテゴリーの追加)。道具が主語になる例が(87)で、擬似中間構文と呼ばれる。被動者の代わりに道具が追加されている。また(88)のように、副詞の代わりに、再帰代名詞が現れることがある。ここでは追加された弱化行為者と、被動者Bの両方が具現化する例になる。この例をしても、弱化行為者が追加されていることが分かる。

(87) a. This pen writes nicely. b. This razor cuts well. (Nakamura 1997:139)

(88) a. This meat cuts itself. b. This silver polishes itself. (Levin 1993: 84)

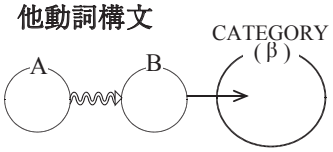
最後に三つめに(72)3【エネルギー弱化】がある。(72)2の操作により、伝達エネルギーが弱まる。追加された被動者/道具では、強いエネルギーを発することが出来ない。そのためB/道具カテゴリーからのエネルギーが、一重破線矢印になっている。これら3操作により、他動詞構文における〈行為〉が弱化され、状態化が進んだ構文が中間構文と言える。

5.4 受身文

受身文は被動者に焦点があたり、被動者主体の構文である。そのため対応する他動詞構文(89)のような行為者始まりではなく、被動者始まりのスキーマになると考えられる。

このとき(72)4の操作【被動者の主題化】が働く。つまり被動

(89) 他動詞構文



部分がスキーマの前半にきて、スキーマの向きが反転する。この反転により、行為者はスキーマの後半部分に置かれる。そのため(72)1【行為者の弱化】が起こる。行為者が弱化することで、(72)3【エネルギー弱化】が起こる。これら3つの操作により、状態化される。

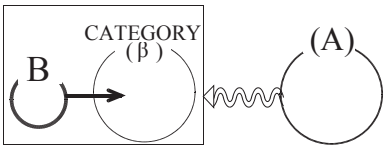
しかし受身文は状態化の程度により、動作受動態と状態受動態の2つに分けられる。両者の違いは、一つに上記3操作の程度の違いがある。例えば行為者の弱化、エネルギー弱化は、動作受動態では弱い。もう一つは逆転して前に置かれる被動部分のどこに焦点があたるかによって、違いが生じる。これを動作受動態と状態受動態に分けて、見ていくこととする。

まず(90)のような動作受動態は、スキーマは(91)になる。(91)は、行為者と被動部分が逆転している。

(90) a. Andrew was killed by the American soldier.　b. The house was painted by the landlord.

被動部分は、□で囲ってある。動作受動態では、変化するプロセスが強く意識される。そのためこの被動部分の中では、移動プロセスに焦点があたっている(太線で表記)。これに行為者Aが関与することを付け加える形で付記される。行為者Aは意識されるが、背景化され表示されないことも多い。

(91)

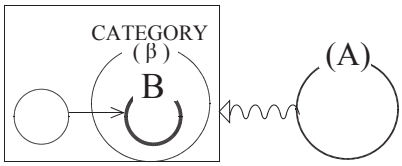


一方(92)のような状態受動態では、行為性はさらに弱い。行為というより、むしろB移動の最終状態(成員になった状態)に焦点が当てられている。そのため(93)に示すように、被動部分で結果状態に焦点があたる。結果状態に焦点が当たるので、行為者Aからのエネルギーは弱いといえる。

(92) a. She was dressed in dark clothes.　b. They have been married for seven years.

最終状態が意識されているため、行為者は現れないことが多い。動作受動態も状態受動態も行為性に違いはあるが、どちらも被動者に焦点があたっている[*4]。

(93)



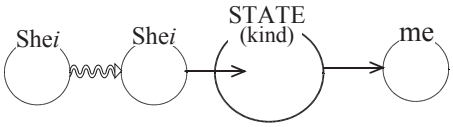
6. まとめ

本稿はカテゴリー分析を通して、動詞の意味を考察した。このとき4つの基本意味〈存在〉〈出現〉〈移動〉〈行為〉を概観し、それらがネットワークをなすことを示した。そして同一構文内で、または言語形式の変更により、基本意味間で推移が起こることを示した。動詞の意味は、基本意味単体、または複合意味で表記された。今後、動詞における意味の分類、意味の推移について、他構文にも広げていきたい。なお本稿で用いたカテゴリー分析はむろん、動詞の分類だけでなく、名詞表現他にも適用する事を想定している。

注

*1 (51)は好意をもっているなど、無意識、無意図的に行われていると考えたスキーマになる。Sheがもし意図的に、親切な行為を私に対して行っている場合は、(i)に示すように、〈行為〉の意味が加わった複合スキーマとなる(cf. (60))。

(i)



*2 緒方(2018)とスキーマ表記でやや異なるが、基本的な考え方・分類については同じである。

*3 中本(1998: 160)では5つの意味を設定するが、その4つめ、他動詞構文にある[+accomplishment/telic]の含意がない動能構文の例(i)をあげている。これらは(77b)に分類される。

(i) a. Tom ate (at) an apple. b. I worked (on) the problem.

*4 状態受動態がさらにすすみ、過去分詞が形容詞になっている場合は、(91b)の A 部分がないスキーマとなる。これは分類としては〈存在〉の意味になる。

引用文献

Carrier, J., & Randall, J. H. (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry*, 23, 173-234.

Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press, Chicago.

Green, G. M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*. Indiana University Press, Bloomington.

Jackendoff, R. S. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press, Cambridge, MA.

影山太郎 (1996)『動詞意味論 : 言語と認知の接点』くろしお出版.

Levin, Beth. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago University Press, Chicago.

Nakamura, Masaru. (1997) "The Middle Construction and Semantic Passivization," in T. Kageyama (ed.), *Verb Semantics and Syntactic Structures*, Kuroshio Publishers, Tokyo, 115-147.

中本武志 (1998)「動能交替の語彙操作」『言語文化論集』49, 159-209.

緒方隆文 (2018)「二重目的語構文と意味のネットワーク」『ことばを編む』, 189-202. 開拓社.

(おがた　たかふみ : 英語学科　教授)